
マンテーニャ作《夫婦の間》再解釈
—ヘラクレス神話受容にみるフィレンツェへの対抗心—

アンドレア・マンテーニャ(1430-1506)は、マントヴァの君主ルドヴィーコ・ゴンザーガ(1412-1478)の依頼により、サン・ジョルジョ城の一室にゴンザーガ一族の肖像を描いた。バルバラとの結婚および息子フランチェスコの枢機卿位獲得を記念するこの大規模な壁画《夫婦の間》(1465-74)西壁の君主と息子との邂逅場面の背景には、ヘラクレス神殿と高い台座上のヘラクレス巨像が描かれる。風景中のヘラクレス像表現はルネサンス期の作品中でも早い例であり、壁画のスパンドレル部分12場面のうち6場面がヘラクレス神話であることから、その神話の頻度は注目すべきである。しかしヘラクレスのモチーフに着目して壁画の構想を論じた研究は少ない。

先行研究としては、この神殿をティヴォリのヘラクレス神殿と同定する R. シニョリーニ(1986)、善政や権力の象徴としてヘラクレス表現を解釈する D. アラス(1987)や C. チェリ・ヴィーア(1987)などが挙げられるが、当時の政治的な状況と関連させて壁画の制作意図を改めて再検討する必要があると思われる。

本発表では、広場における高い台座のヘラクレス巨像というモチーフに着目する。ローマには同形式の古代彫刻《ボアリア広場のヘラクレス》が残存していて、それと関連する作例としてはフィレンツェのメディチ家がドナテッロに発注した青銅像《ダヴィデ》が挙げられる。古代彫刻メルクリウス像との関連も指摘されるが、その着想源はヘスペリデスの黄金の果実をもつヘラクレスにある。

マンテーニャは壁画発注の翌年である1466年にフィレンツェを訪問していて、当地の共和政の象徴としてのダヴィデとヘラクレス図像の融合に関心を示した可能性が考えられる。《夫婦の間》西壁の背景にはヘラクレス神殿と対称的な位置に東方三博士の姿が描かれており、また全体の構図の類似も、メディチ家宮殿礼拝堂のマジの壁画との関連を伺わせる。

フィレンツェの傭兵隊長を務めていたゴンザーガ侯はコジモ・デ・メディチとは親交が深かった。ルドヴィーコの父ジャンフランチェスコはフィレンツェのサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂への寄付を遺言し、さらにルドヴィーコが聖堂の増改築工事の際に出資したことからゴンザーガ一族のフィレンツェに対する意識の高さが指摘できる。

以上のことから、《夫婦の間》のヘラクレスの表現はフィレンツェにおけるヘラクレス=ダヴィデの政治的なダブルイメージを強く意識して挑戦した結果であると想定される。それゆえに、オスマン・トルコによるコンスタティノポリス陥落後のマントヴァにおける1459年の宗教会議や、経済状況の変化などの政治的・経済的要因も踏まえて、マントヴァ侯とマンテーニャが《夫婦の間》でフィレンツェを意識して制作した意図をヘラクレス図像から推論してみたい。